

## 今、何をなすべきか？ 縮小社会研究会の課題

### —政治と社会運動—

青野 豊一

何故、多くの人たちは、あいも変わらず「成長がすべてのケガを癒す」という価値観にとらわれているのか。どうして、このような意識状況になるのであろうか。このような状況では、ともすると私たちは絶望的な意識に落ち込んでしまうこともある。でも、これは、実は、簡単なことなのだ。

未来社会が縮小社会となることを、多く人は漠然とは感じつつも、このようなことは「知りたくない」「考えたくない」という意識で、様々な情報をシャットアウトしてしまっているのだ。でも、この「知りたくない」「考えたくない」という意識になっていることを明瞭には意識していないのだ。様々な情報を、種々の意見の断片を拾い集めると分かりそうなのだが、そうではない。知らないという事、考えようとはしない事は、知識・教養の、そして知性の低下ではない。このまま、「知らないままに」「気付かずにいたい」というある意味ひたむきな努力の結果なのである。大衆は、無知なのではない。怠惰の故の無知なのではない。一つの努力した、勤勉な生活の結果なのだ。知らずすむようにしようという、聞かなかったことにしようとする日々の努力の故に、このことから必死になって目をそらそうとしてきた結果として、「みじめな喜劇」を選択してしまうのだ。しかし、このような意識の働きを、個々人ははっきりとは意識していない。

昔の経済成長への淡い期待に、いつまでも浸っていたいのだ。ぬるま湯の温泉に入りたいと夢見ること、幻想(\*消えない夢)を保持することに努めているのが、多くの人たちの意識の現状であらう。

人が歴史を正しく理解するために知らねばならぬのは、当に幻想(\*消えない夢)なのだ。何故なら、根本に於いて、政治的行動やその他、もろもろのものを支配するのは幻想であって、理性でも、採算のとれる利潤でもないからだ。\*ホイジンガ『中世の秋』

### 目 次

- 1.政治的な行動—大衆の夢、反復の構図
- 2.何をくみ取るか—政権交代、消えない夢
- 3.政治家をどのように評価すべきか?—菅直人の政治的質
- 4.社会運動—「縮小社会研究会」としてなすべきこと

#### 1.政治的な行動—大衆の夢、反復の構図

反復と失敗なくして、歴史は進展しないし、夢は現実へと向かわない。  
一度には変革できなくても、この夢がある限り、明日はよくなっていく!!

マルクスが『ブリュメール 18 日』で見出したのは、人々の社会意識が、社会経済的な階級構造から一見独立して進行したり、それに反して進行したりする事態であった。労働者階級に属する者がナチスを支持したり、維新の会を支持したりすることである。維新の会の政策が実施されると一番苦しくなるはずの階層の人たちが熱狂的な支持者となったりする事態のことである。軍政に希望を抱いたり、独裁者に期待したりする社会的意識が生まれたりすることの理由を分析している。

産業ブルジョワジーやその他の階級も、その「代表する者」を見捨てて、自分たちに都合よく解釈してボナパルトを選択した。このように、代表議会制では、支持は流動的なのだ。マルクスはこの書で、ナポレオン三世の周囲にいる人たちを、実質的な階級から脱落した、「言説」だけで生きている人たちであるとして、ルンペン・プロレタリアートとして嘲笑している。しかし、実は代表議会制民主主義体制での、政治的に有能な人たちだったのだ。今日的に言えば、マス・メディアによって形成されるイメージが現実を作り出すように仕向ける選挙のプロ集団と言えよう。この書で、マルクスは、「代表する者」と「代表される者」との関係は固定されていなくて、恣意的であり、政治手法で大衆の意識を操作することができることを、示している。

\* だから、この『ブリュメール 18 日』は、今までのマルクス主義者達が言ってきたような、エンゲルスの言うような、唯物論に基づく歴史書などではない。

ナポレオン三世は、あらゆる人を代表しなくてはならなかった。しかし、それは、不可能な事であった。資本家たちの労働運動に対する恐怖とそれを抑圧する強力な政治への期待感、労働者たちの資本家たちへの反発、商店主や農民の資本家への反発と労働者運動への嫌悪感、そしてナポレオン一世への幻想を巧みに利用して、あらゆる階級・階層の期待を集めて、大統領(1848 年 12 月全投票数の 74%)になった。

51 年 12 月、クーデターを起こし、国民投票(92%)で承認される。52 年 11 月の帝政復活の国民投票では、なんと 98%もの支持で皇帝となる。

マルクスは、次のように書いている。

…ボナパルトは、すべての階級の家父的な恩人として現れたがっている。しかし、彼は他の階級から取ってこなければ、どの階級にも与えることができない。  
…自分の状況の矛盾する諸要求によって駆り立てられ、同時にまた手品師のように、たえざる不意打ちによって公衆の目をナポレオンの代役としての自分に向けさせる必要に、したがって毎日ごく小規模のクーデターを行う必要に迫られて…。

常に新しいイメージを大衆に与え続けること、イベントを行うことで、幻想をふりまき、支持を取り付けることが必要であった、ということ。今日的に言えば、ワイドショー的な政治の始まりと言える。このようなことは、代表議会制では、当然のこととして現れ出る。小泉元総理の手法を見てきた者には、よく分かる話である。

このようなことが、議会制民主主義という制度では、繰り返し起こる。でも、反復する

のは、具体的な出来事ではなくしてその形式であり構造である。この繰り返しは、代表制議会という制度で発生してしまう可能性がきわめて高いものなのだ。だから、現代でも、このようなことが復活してしまう可能性がある。これは、大衆の夢とも言えるものが、政治的な言説として現れ出たものとも言えよう。

## 2.何をくみ取るか—政権交代、消えない夢

ここからは、長年日本を統治してきた自民党から民主党へと政権交代が行われたその意味について、考えていきたい。「普通選挙」で、代表制議会の制度によって、「政権交代」がなされたその意味を思考してみよう。

ここまでマルクスの『ブリュメール 18 日』を参考にして思考してきたので、次も、この著作を参考にして考えてみたい。この本では、あの有名な言葉が最初に書かれている。歴史上の重要な出来事は二度現れる。ただし、一度目は悲劇として、二度目は笑劇として。この言葉についての疑問は、二つある。

- ① 歴史上の重要な出来事は、何故、繰り返されるのか。
- ② 一度目が悲劇で、何故、二度目は笑劇なのであろうか。

まず、①の疑問について、「普通選挙」という制度の下で、何故繰り返されるのかを考えてみよう。『ブリュメール 18 日』で繰り返されているのは、一度目は 1789 年のフランス革命である。二度目として挙げているのは、1848 年の二月革命である。一度目はナポレオン一世が革命を引き継ぎ、そして終了させた。二度目はナポレオン三世が、二月革命を引き継ぎ、皇帝になることで革命を閉じた。一度目の革命は、その掲げた理想「自由・平等・博愛」は素晴らしかったが、結局そのことで誕生したのは弱肉強食の資本制生産様式の全面展開であった。二度目の革命で誕生した第二共和政は、労働者階級にも配慮した社会共和政とも言いえるものであった。普通選挙も実現した。これまでと比べて極めて民主的な政体であった。しかし、この共和政も、あまり時間を置かずして労働者たちを弾圧・排除するブルジョワ独裁体制へとなっていった。そして、1851 年 12 月、時の大統領ナポレオン一世の甥がクーデターを起こして皇帝となった。

さて、ここから、日本の歴史上の出来事の繰り返しについてみてみよう。

2005 年の衆議院選挙(小泉氏の郵政選挙)と、2009 年の「政権交代」選挙を比較してみよう。そうすると、2009 年の「政権交代」選挙は、2005 年の選挙の繰り返しであることが分かる。語られている言葉は違っていても、そこで現れた選挙民の意識構造は、〈大衆の夢、反復の構図〉の形式を繰り返されている、とみなしてよいように思える。

2005 年の選挙は、郵政改革の一点で解散総選挙となった。その他のことを、時の総理は語らなかった。郵政問題は多くの国民にとって生活に直結する事柄ではないのに、郵政改革派の自民党は大勝した。普通は、多くの国民にとって日々の生活に大きく関わらないことを主張すると、その政党は敗北すると予想される。それなのに、自民党内の郵政改革支持グループが大勝した。自民党内の反対派と野党は、敗北した。マスコミは、連日、自民党内の紛争と、総理の動向を報道した。そのため、民主党の政策や動向には、興味・関心が向かなかった。あの時、民主党は、「年金問題」「自衛隊の海外派兵の問題」「経済対策」「・・・」と、日本社会の抱えている問題を列記して、

その解決を訴えていた。普通ならば、民主党が勝利するであろう。でも、大敗したのだ。

ならば、国民の多くは、郵政改革に大きな関心を寄せていたのであろうか。実は、そうではなかったのだ。これは、国民の多くにとって、選挙の争点ではなかった。世論調査から見て、郵政改革を支持して、自民党に投票したのではなかった。国民は、日本社会の抱えている問題をすべて根こそぎ改革するという夢を、「郵政改革」に託したのだ。この特殊な問題の解決が、日本社会の変革というイメージを代表していたのだ。あの時支持されたのは、「郵政改革」を突破口として、日本の政治の停滞を振り切り、山積みされている社会の問題を一挙に解決するかのとき総理の拒絶の身振り・言説であったのだ。「なんでもいいから、とにかく変えてほしい!」という積もり積もった意識を、小泉氏に託したのだ。ちょっと冷静になれば、自分たちの生活のことなど、小泉氏が知るはずがないのに、…。夢を託したのだ。

郵政改革に異様な情熱を示して、他のあらゆることを断固たる姿勢で配慮の外に叩き出したこと、これに、人々は魅せられた。「郵政改革」と他の大多数の個々の政策(例えば、年金問題)が天秤にかけられ、この特殊なことが選択された。つまり、「郵政改革」が、全体とみなされたのだ。だから、票が激しく流動化した。階級・階層を越えて小泉支持へと流れた。マスコミは、毎日この自民党の内紛を面白おかしく伝えた。野党のことなど、まったく報道しなくなった。人々の投票行動は、マスコミの動向そのままであった。

しかし、この選択は、誤っていた。郵政改革が実施されても、それは日本社会の全体的構造とは回線が繋がっていないのに、そう強く意識した。郵政改革が、漠然とした社会総体の変革として、国民に意識された。

2009年の総選挙も、同じように、票が激しく流動化した。同じことが繰り返されている。この時のキャッチフレーズは「政権交代」であった。この時は「政権交代」とその他の政策が天秤にかけられ、国民は夢を託して、日本社会の変革と名付けられていたボタンを国民は強く押した。「政権交代」のプログラムはそんなに明瞭ではなかったが、電流はとぎれとぎれにしか流れていないボタンであったが、国民はこれを選択した。

私は、ここでこのような国民の意識をバカにして、無意味であると見なしているわけではない。多くの国民の中に湧き起こってきた思いを冷笑しているのではない。今まで書いてきたような劇的な様相の選挙結果が起こってしまうその構造を述べているだけである。1789年のフランス革命は「自由・平等・博愛」をスローガンとしたが、その実態は政治的にはジャコバン独裁となり、資本制生産様式の確立という結果に終わったが、ここで大切なことは、批判することより、そこから何をくみ取るかであろう。

評価すべきことは、この革命によって、フランスの多くの大衆の中に、そして当時のヨーロッパの意識ある人の中に「熱い思い入れ」が発生したことであろう。遠く離れていた今のロシアの地(東プロイセンの首都)にいたカントは、この革命に強く・熱く期待した。社会は変わり得るということ、この可能性が多数の人たちの中に宿ったことを評価している。このカントのように、この熱き思いを抱くことを、まず認識すべきなのだ、と私は思う。はっきりしていなかった可能性が、実質のある可能性へと転換でき得ると感じ取れる。これを体感すると、この後、私たちの心には社会変革へのリアルな夢が事あるごとに湧き起こる。消えない夢として人々の心の中に住み着くのだ。このような夢が宿るとは、解放が絵空事的でなくて、現実可能になるという熱い思いを心の中に

灯しているということである。たとえ社会的・政治的変革が失敗して悲惨なことになっても、その悲惨な現実、可能性の夢が張り付いていつまでも心に残ることとなる。

\*このようなことを掴み取ることができる人と、できない人がいる。このような出来事を否定的に総括したのが、ヘーゲルである。彼は、フランス革命を裏切られた革命としている。この思いから、フランスとは異なったドイツ的な近代化の在り方を思索した。そして、当時のプロイセンの絶対主義体制を承認することとなる。そう、反動的思想家となった。

\*「大衆の夢、反復の構図」の意味を把握できなくて、大衆の愚かさを指摘して民主主義を否定したり独裁政治を賛美している人たちがいる。

大衆の受容能力は非常に限られており、理解力は小さいが、その代わりに忘却力は大きい。この事実からすべての効果的な宣伝は、重点をうんと制限して、そしてこれをスローガンのように利用し、そのことばによって、目的としたものが最後の一人までに思い浮かべることができるように継続的に行われなければならない。

\* ヒットラー『我が闘争』

革命と日本の政権交代ではその規模が異なるが、国民大衆の中には、同じような意識が生じていると思える。日本においても「政権交代」は論理的には可能であるとは思っていたが、これがこんなに簡単に起きるとは思っていなかったのが、実際のところであろう。長期の自民党政権が続いていた。保守的な意識は強固であった。どのような不祥事があっても、国民の政治意識はそれまでずっと変わらなかった。日本の政治を変革することは、とても難しいと思われていた。それが、この時ころりと変化したのだ。票が、国民の意識が激しく揺さぶられ、階級・階層を越えて民主党に流れた。頑迷な保守の壁が崩れたのだ。

政権交代のその実際、その結果についてはいくらでも批判できるし、どしどししたらよいであろう。でも、我々の心の中には、自民党以外の政権もありうるという可能性を、現実のものとするのができたという「熱い意識」を体感したということが、最も重要である。だから、また自民党政権が復活しても、政権交代は起こり得るということ、多くの国民がこの可能性を心に宿したのだ。このことが、まず第一の成果としなくてはならない。手で払っても、窓を閉めて布団をかぶっても、消えない幽霊のような夢が、私たちの中に、一定数の国民の中に宿ったということ、評価しなくてはならない。

自民党政権下の官僚的行政とは違った別の政治を試みることができるという夢、アジアとの連帯が可能であるという夢、生まれ落ちた家庭によって初めから決められた人生を歩むのではない、チャレンジできる機会が与えられている社会という夢等が、一瞬でもかなえられそうに思えた時があった。

もちろん、この夢は、そんなに簡単にはかなえられない。自民党政権の復活という形で、民主党政権は終了した。そこで、この厳しい現実から、裏切られたとして民主党政権を批判することはできる。でも、それより大切なことは、評価すべきことは、厳しい現実を知りつつも、実現でき得るかもしれない可能性を、政権交代の可能性を、私たちが体得できたことであろう。現実の裏としての夢を保持することができたのだ。

これは、「普通選挙」下での国民大衆の夢が現れ出たものであり、またそれは政治危機として現れ出たものである。一度このような出来事が起きてしまうと、現実の裏に、

このような夢が張り付いてしまう。そのため、現実の政治の世界は隠れたユートピア的な期待に対する裏切りとみなされる。このような思いを、国民の中の一定数の人たちが、以前と比べてたくさんの人たちがするようになる。これは、消え去ることは、ない。

2009年の政権交代選挙は、2005年の郵政選挙の時に果たされなかった夢(日本社会全体の改革)を果たしてもらおうとする大衆の意識の現れ出たものである。この夢は、郵政選挙の後すぐ裏切られたことに気付いた。だから、もう一度、この夢の実現を迫ったのが、「政権交代」選挙なのだ。

次は、②の疑問、何故、一度目が悲劇として現れ出て、二度目は笑劇となるのだろうか。

「普通選挙」を通じた大衆の夢は、実際には、二度目も夢は実現することはなかった。フランスの1848年の二月革命では、ナポレオンという名前の人が、皇帝となって革命は終わらされた。それなのに、ナポレオンという名前に心惹かれて投票した人たちがたくさんいた。これでは、理性的判断とは、とても言えない。一度目のナポレオンに裏切られているのに、…。でも、他の国々と比較すると、ナポレオンは、革命したフランスの現状を守ろうとした、ともいえる。

ナポレオン一世は皇帝になると、当時の反革命の中心国であったオーストリアのハプスブルグ家とつながって革命のさらなる推進を握りつぶした。それなのに、人々はまたまた、同じような間違いをしている。最初の出来事は、大衆にとって、大いなる悲劇として終了した。でも、ナポレオン崇拜の意識は強く残った。そして、二度目の革命は、1848年の二月革命も、みじめな悲劇として終結した。

ここで、プルードンの言葉を引用したい。彼は、マルクスのように、このことについてまとめた文章は書いていない。彼は、一人の市民として、また一人の国会議員として、二月革命の渦中にいた。そのために、離れた地から見た文章は書いていない。

500人が集まった集会で、5分間のうちに割れるような拍手をもって、経済学上の最も困難な問題、会議において誰もその最初の言葉さえ知らないことが確実と思われる諸問題に決定が下されるのを見ました。私は、最も愚かしい動議が熱狂的に歓迎され、ついで幼稚で笑うべき提案が全員一致で支持されるのを聞きました。今日、頭脳を動かしているのは、経済思想ではありません。誰も経済学を勉強しなかったのですからです。それは、1789年の思い出です。革命の歴史物語の読書から引き出された熱狂です。それは、ただ常識と正当な権利だけをもってかくも偉大なことをなした我々の父たちを、大事件によって凌駕したいという欲望です。私たちは私たちの思い出に夢中になっており、私たちが社会を変革するために社会を受け取るのは思い出によってなのですが、その社会は以前のそれとは何の共通性もありません。だから、何をなすべきかも言うことができないのでしよう。 \*1848/4/10 プルードン「ゴードンへの手紙」

この二月革命は経済的革命でなくてはならないのに、そのための諸方策と諸理念の提示が大切であるのに、それが分かっていない現状に対して、このように述べている。そして、このことを一般大衆に語りかけることで、プルードンは6月には、補欠選挙

で、国会議員に当選している。しかし、彼の提案した政策は、一気に反動化した議会で、ことごとく反対された。そして、その言動ゆえに投獄されてしまった。

この繰り返された二度目の出来事は、このようなことが繰り返されるという社会構造は、大衆の社会意識は、今から振り返ると、悲劇であり喜劇的であったと言えよう。歴史の流れを少し離れて見つめると、これは、もう吉本新喜劇的なドタバタ劇が繰り返されていると言えよう。落語の「落ち(笑い話の結末)」のように、最終の結果が初めから予想される出来事として、……。だから、一度目は「偉大な悲劇」として、そして二度目は「みじめな喜劇」として演じている。

でも、このことは、大衆の愚かさを言いたいのではない。ここでこのような国民の意識を無意味であると思なしているわけではない。多くの国民の中に湧き起こってきた思いを冷笑しているのではない。今まで書いてきたような劇的な様相の選挙結果が生じてしまうその構造を指摘しているのだ。この眼前で行われてきた社会的出来事を喜劇的であるとして、冷静に見ることの必要性を指摘しているのだ。

このようなことからくみ取ることは、笑劇的に、二度目を作り出してしまふ大衆の夢、実現可能なものとしての夢が消えずに残っていた、ということであろう。だから、繰り返されるのだ。この反復と失敗なくして、歴史は進展しないし、夢は現実へと向かわないのだ。

一度には変革できなくても、この夢がある限り、明日はよくなっていく可能性がある。これが、今回の「政権交代」の意味であろう。フランス革命の理念は実現されなかった。政権交代の効用はリアルに現れ出なかった。でも、このような理念は、諸々の社会問題の解決の段階的実現を図っていくには大きな効果がある。社会がよくなるためには、失敗することも引き受けなくてはならない。あえて行うということこそが、大切なのだ。後の歴史家が批判するかもしれないことを、あえて行う勇気こそが、政治家として求められる資質であろう。

### 3.政治家をどのように評価すべきか?—菅直人の政治的質

民主党の辻元議員の次の言葉こそ、民主党政権の現実が語られている。

政権交代には、自民党のやり方を熟知する小沢さんの力が不可欠でした。しかし、小沢さんに政策の理念があったかといえぱやっぱり疑問です。彼が代表に就いたとき、小泉政権の後の自民党に勝つために、新自由主義的な方向へのアンチテーゼとして社民主義的な政策を旗印にしました。○九年の民主党のマニフェストも、小沢さんが代表時代に作成したものが元になっていますが、結局小沢さんにとっては、選挙に勝つための『手段』だったのでは。だから大盤振る舞いだった。『実現できるかしら?』と聞くと、『政権とったら何でもできる』と小沢さんは言うばかり。理念があつて心からこれを実現したい、実現すべきだと思っていれば、もっとしつとく粘るはずですが……。3.11後も、あの非常時に小沢さんは『菅おろし』に走りまわりました。そういう小沢さんの政局的仕掛けに党内は振り回されて、反小沢・親小沢という対立軸で動いたようなところがあり、政治がゆがめられてしまいました。

民主党には、官僚政治からの脱却の視点はあった。でも、現実の壁は厚く、保守の岩盤にドリルで穴をあけることができなかった。そこで、この政権交代を批判して、民主党＝自民党として切り捨てる人がいるが、それは、あまりにも短絡的思考であろう。理想の政党を思い描くのは結構だが、現実的にどうするかを考えなくてはならない。

日本には、今まで、そして今も、国会や内閣で掌握できない組織がある。日本国の中に、三つの国家(\* 比喩)がある。

まず一つは、日本は一人前の主権国家であるとは、言い難いのだ。このことは、外交問題に、特にアメリカとの関係で、明らかなことである。アメリカの言いなりになるしかないシステムなのだ。日米安保条約、そして、日米地位協定等で、ガチガチに固められている。アメリカの属州待遇なのだから。

二つ目は、自民党と財界とキャリア官僚たちがスクラムを組んでいる、組織である。この組織はものすごく強力で、未だ解体できていない。この組織が、国家財政を食い物にしている。この人たちが、税金として徴収したものを、一般会計として、また、特別会計として、いろいろと名目をつけて使っている。民主党政権がもう少し長期であれば、官僚たちが変わり始めていただろうが、短すぎた。「政権交代には、自民党のやり方を熟知する小沢さんの力が不可欠」であったが、小沢氏がいては民主党が一丸になって取り組むことができなかった。民主党政権は、大きな矛盾を抱えていたのだ。

もう一つは、天皇制。これを支えている皇室の財産に、手を付けることができていない。明治以来、蓄えてきた膨大な資産があるのに、・・・。

これらのことに気付かないで、民主党批判を繰り返して言い立てることは、簡単なことであり大きな過ちである、と言えよう。TPPにしても、消費税にしても、年金の問題、金融危機等をどうするのかという、現実問題を回避することはできない。それも、システムの変更できていない時に、決断しなくてはならない。これが、大きな壁となって立ちはだかっていた。巨大な官僚組織と、経済界を相手にするには、小沢氏がいては党内が一致できなかった。これでは、とても立ち向かえなかった。でも、彼がいないと、雑多な意識を持った政治家たちを結集しないと、政権の獲得はできなかった。これは悲しい現実であるが、いい教訓として再出発しかない。

現実の政治では、何を評価して、何を問題視するかという視点が重要である。評価できることは、たくさん評価すべきであると考えよう。

3・11の東日本大震災と原発事故の時、総理としては、民主党の菅さんでよかったと思う。他で私が思い浮かべることができる幾人かの人をもし総理であったら、・・・。これはとんでもないことになっていた、と思われる。批判は、しようと思えば、いくらでもできる。批判だけでは、政治家は育たない。大きな方向性が間違っていなければ、まずは評価しなくてはならない。

政治というものは、まず、相対的に評価すべきであろう。原発事故の時の総理であった菅直人は完璧な超人ではなかった。彼がそれまで言っていたことは、実現できなかった。しかし、政治家を評価する基準として、存在しない超人を持ち出しても意味がない。福島原発についていえば、公開された動画でも明らかだが、東京電力の幹

部は海水注入を渋っていた。氏名は明らかにされていないが、「もったいない」と発言した幹部もいる。福島原発の吉田所長が東京電力の幹部の意向に反して海水注入を続けることができたのは、政治の決断と関係がある。菅直人が「全面撤退はありえない。全面撤退したら東電は潰れる」のような発言をしたことは、少なくとも東京電力に最低限の責任を取らせるという政治の決断を示したものであり、極めて妥当といえると思われる。この海水注入による冷却をしていないと、メルトダウンとなり東京からも撤退しなくてはならない事態となっていたであろう。

菅直人についての評価は国内より国外でずっと高い。批判的な記事もあったが、菅直人のリーダーシップに国会、そしてマスコミが、国民もついていけなかった。

短期の政権では官僚が動かなかった、と私は思っている。事故前に原発推進派だった菅直人は、事故後に脱原発を唱えている。事故に際しての危機対処能力は十分ではなかったかもしれないが、本来の政治の仕事であるより長期的な危機管理において、菅直人には十分な資質があると言えるであろう。

原子力安全・保安院というのは、安全神話を語ってきた電力会社や原発の製造メーカーからの出向社員もいた原発推進派の牙城であって、事故当時機能不全状態に陥っていた。彼らは「震度9など想定していなかった」とか、「地震対策はしてきたが、こんな大きな津波が起こるとは知らなかった」とか、いいわけを続け、自らの間違いすら認めなかった。専門機関が機能不全状態にあったのだから、首相自らが直接指示を出すしかなかった。保安院に判断を任せていたら、海水注入は行われていたであろうか？東京電力に判断を任せていたら、撤退せずに作業を続けていたであろうか？

河野洋平元衆議院議長（元自民党総裁）は、次のように言っている。

「自民党政権が進めた原子力政策の中で大きな誤りがあったことは認めねばならない。それは2001年の中央省庁再編の際に、以前は科学技術庁で行われていた原子力施設の安全規制業務を経済産業省の下部組織である原子力安全保安院に一元化してしまったことだ。原発の安全規制を行う組織が、原発を推進する立場の経済産業省の下に配置された。原子力政策の最大の失敗といえるだろう。自民党はできるだけ早く失敗は失敗として認めてお詫びをして、安全を確保する新たな体制づくりに協力してもらいたい。福島第一原発の事故以来、脱原発論が各方面で論じられるようになってきている。しかし、現実問題として考えれば、いまずぐに原発を止めるというのはそう簡単なものではないだろう。原発を含めたエネルギー政策全体を、大きな問題としてとらえた上で、原発依存度は現在のままでよいのかという原点を見直す必要がある。何よりも人間の命、家庭、社会の安全を維持し、不安を除去することが政治の役割であるからだ。」

しかし、自民党は、電力会社と原発メーカーは、そして官僚たちは、さらに原子力関連の専門家たち(原子力村の学者たち)は、今までの原子力政策を失敗とは認めていない。そして、事故当時、テレビの前で頭を下げていた東京電力の幹部たちの多くは、今、家族を連れて海外での生活をしている。日本から脱出している。私たちは、棄民されているのだ。事故当時現場に入り、指示したのは、菅直人総理であった。この現実も、知らなくてはならない。

このような情勢下であったのに、当時の民主党政権批判にエネルギーを激しく注ぐ

のは、これまた歴史が示しているように、これまでの共産党のしてきたことである。唯一の革新、唯一の理想の党なんていう思考で、民主党政治を批判することは大きな過ちだと思われる。また、他の党派でも、このような同じ過ちを繰り返すようでは、政治党派としては失格であるといえよう。

ここで、マックス・ウェーバーの『職業としての政治』から、引用しよう。この中で、政治家の資質について、次のように書いている。

「政治とは、情熱と判断力の二つを駆使しながら、堅い板に力を込めてじわじわと穴をくりぬいていく作業である。もしこの世の中で不可能な事を目指して粘り強くアタックしないようでは、およそ可能なことの達成もおぼつかないというのは、まったく正しく、あらゆる歴史上の経験がこれを証明している」

この言葉を、かみしめなくてはならない。政治活動では、ロマンを抱いてリアリズムに徹する視線をこそ大切にしなければならない。リアリストはロマンチストであり、ロマンチストはリアリストたらしなくてはならない。何を評価して、何を問題視するかという視点をもたずに、すべてを批判するのは愚か者の選択である。

#### 4.社会運動—「縮小社会研究会」としてなすべきこと

今まで政治活動について述べてきたが、ここからは、「縮小社会研究会」としては、今、何が最も大切なのかについて、考えてみよう。

「社会運動」としての「縮小社会研究会」では、政治的成果を短期間に求めてはならないであろう。政治活動では、消えない大衆の夢とその失敗の繰り返しが大きな役割を果たしてきたが、「縮小社会」へと人々の意識を変容させることは、これとは異なる。これまでの歴史では、大衆の夢が繰り返されることで、政治は変革されてきた。でも、社会が縮小へと向かうには、この繰り返しから、みじめな喜劇から覚めなくてはならない。

私たちはこの「縮小社会」へ向けての取り組みを急いで活性化させなくてはならないし、全地球的にも、全人類的にも、そんなに時間的余裕はないことは、確かである。でも、個人的にあわててどうなるものではない。大事なことは、今なすべきことを、間違えない事であろう。大衆を夢から覚ませることは大変困難なことなのだから、このことを覚悟して、さまざまな取り組みをしなくてはならない。

日本国の借金、1000兆円を超えた。年金の仕組みは、このままでは破たんすることははっきりしている。そこで、民主党政権では、この財政支出を抑制することを取り組んだ。でも、それまでの継続事業等で、そしてキャリア官僚の抵抗で、このことがなかなかうまく進まなかった。政治家が縮小を決めても、実際の予算執行では、この縮小が平然と無視されていた。民主党政権では、このように国家財政の破産を食い止めるために、それなりの取り組みをしようとしてきたのだが、…。そして、大地震と原発事故が起こった。そのために、巨大な国家財政の支出が必要となっている。

でも、国民はその意味がよく分からなかった。自民党の安倍内閣のものすごい財

政支出に対して、ものすごい賛辞をする人たちがいる。この財政支出、つまり湯水のごとく赤字国債による財政支出で、今年の2月・3月のころの土建業者は忙しくて休みが取れないくらいであった。3月期のボーナスまで支給された企業がたくさんある。末端の労働者たちは、喜んでいて、安倍内閣の政策への支持を露骨に表明していた。マスコミも、ことあるごとに賛美していた。

しかし、このようなことは、もうしてはならないのだ。そもそも、今の社会経済のシステムで、もう二度と以前のような高度成長はありえない。先にプルドンの言葉「その社会は以前のそれとは何の共通性もありません」を引用したが、私達の向かおうとしている社会は今までとは大きく異なってきたことを認識しなくてはならない。かつてのような著しい経済成長が、資本の蓄積ができ得る状況にはないのだ。

\*このことについては、『資本主義という謎』水野和夫 大澤真幸 NHK 出版新書の私のまとめを参照

でも、将来のことより、今の現実利益が優先している。高度経済成長の蜜の味が忘れられないのだ。そのために、民主党政権の政策批判を口にする。安倍内閣の政策によって、国の借金が国民一人当たり900万円を超えた。このことについてマスコミは、少し報道した。でも、安倍内閣の財政政策のためであるとは、一言も言わなかった。

人類の生存の可能性を狭めていることについて、一度目は経済成長にともなう大きな悲劇として体験している。水俣病に体表される公害として、そして、ここで一つ一つあげることのできないほどの大きな問題を体験してきた。でも、またまた、同じことを、国民の多数派は選択した。原発の事故が起こっても、…。安倍内閣の政策、アベノミックスのその結末が、その結果どうなるかが予測されても、「落ち(笑い話の結末)」が初めから予想されるのだが、…。それでも、同じことをしている。みじめな結末としての喜劇の最中に、私たちはいる。

バブル崩壊後の赤字国債による財政支出によって景気浮揚を試みたが、それはまったく効果がなかった。これは政治の無策は、まさしく悲劇的であったことを示している。そのために、膨大な国家財政の赤字を生み出してしまった。このことを多くの国民は知っているのに、またまた同じことを選択した。そして、このみじめな喜劇の結末は、分かっている。でも、同じことを選択する人たちがいる。かつての高度成長社会とは、以前のそれとは、今の、そして今後の社会には何の共通性がないことを知らなくてはならないのに。

このような現状のなかで、私たちは何を、今、すべきなのであろうか。

①一つは、はっきりしている。ぬるま湯から出なくてはならないことを、夢から覚めなくてはならない事態になってきていることを大衆が意識できるような取り組みをしなくてはならない。まずは、イノベーター理論にいう16%の人たちへの働きかけをしなくてはならない。全国各地での講演会の実施、そしてパンフレットの発刊、多くの人の思考を刺激する書物の発刊等が、すぐ思いつく。

②そして、もう一つある。「縮小社会」が大衆の夢として思い描くことができるものであることを提示しなくてはならない。社会が縮小しても、日々の生活がきちんと成り立

ち、文化的にはより豊かであることを、このようなライフスタイルを指し示していくことをしなくてはならない。

①と②のことをまとめた小冊子等の発刊等をしていきたいものである。第二分科会と第六分科会の合同の会を実施したことの意味が、ここにある。この分科会の成果を目に見える形としなくてはならない。

③さらに、もう一つある。三石博行氏は、この研究会の在り方として、次のように述べている。

つまり、縮小社会という未来の社会の在り方について、誰も答えを持っていないと言うことを共有することだと思います。暗中模索ですね。しかも、その模索は人類史上最も人類が豊かなエネルギー資源を活用し、科学技術(知的生産)を発展したその時点から始まるのですから、余計に大変だと思います。「禁断の果実」の甘味を知り尽くした人々に「粗食」を毎日食べてもらうことになりかねないのでです。

積極的にその意味を理解するか(主体的な変革論)であれ、個体と種の絶滅の危機に瀕する(宿命受け入れ論)であれ、何らかの答えが必要です。

もし、答えが必要だと思うなら、積極的に答えを準備しようと言うのが、この縮小社会研究会のスタンスかもしれません。

・・・中略・・・

だからと言って、答えがあるわけではないのです。「同じ阿保なら踊らにやそん、そん」と言うように、同じ答えのない状態なら、みんなでワイワイとやろうと言うのが、私のグループディスカッションや分科会の提案でした。それぞれのグループで、またそれぞれの問題提案者の発想で、ともかくワイワイガヤガヤと続けるしかないようです。

中には、少しだけ理路整然と問題点を整理し、少しだけ遠くの課題を照らすことのできる人も、出てくるかもしれませんね。

それなら、その人を選んできて、問題提起者になってもらって、また、それより先の方向について、ワイワイガヤガヤとやるしかないでしょう。

このように述べているが、私としては、この中で、研究会として最も大切なことは、「理路整然と問題点を整理し、少しだけ遠くの課題を照らす」思想を作り出すことであろう、と思っている。そのようなことができ得る条件を、研究会として整えていくことであろう。だから、現時点では、ワイワイガヤガヤとした討議が必要なのである。この顔を合せた騒がしい語らいの中から、「遠くの課題を照らす思想」が誕生するであろう。

私達の住んでいるこの社会は、そして現実の社会は、たくさんの紆余曲折を経て、変化していくであろうことが、予測される。私たちが期待しているようには、なかなかなりがたいであろう。そして、大きな失望感を抱き、社会への期待を喪失してしまうことになりかねないのが、現実の私たちの歴史であった。

このような状況下で、後の世に、私たちの以後の人々にとって最も役立つことは、「縮小社会」に向けての取り組みの過程で生まれてくる社会思想であり、そのことを叙述した書物であろう。このようなことがなし得る研究会としなくてはならない。

J・S・ミルは、自伝の中で、自分の今までの諸活動を振り返り、次のように書いている。社会の制度改革はいろいろと改革なされてきたが、自分としていろいろと頑張ってきたが、でも、…。

…だがせつかくの変化も、思ったほど人類の幸福に資してはいなかった。人類の生活が本当の意味で改善されるには知性や道徳の向上が欠かせないが、この方面にさしたる進歩がなかったことが原因である。それどころか退歩した面もあり、差し引きすれば結果的に前より悪くなったのではないかとも思われた。…一般の英国人は、…旧態依然の考え方や感じ方が抜けきらず、…。…一部の誤りは排除できても、おおもとの考えが知的にも道徳的にも変わっていないからである。考え方の根本的なところが劇的な変化を遂げない限り、所詮人類の生活の大幅改善は望めない。—今ではそう確信している。…にもかかわらず、新しい思想の芽生えを阻む力はしごとく残っている。世の思索家が、それまで絶対視されていた思想をもはや信じられなくなる時、あるいは本質にかかわる修正を加えなければ信じられなくなる時に、過渡期が始まるのが普通である。…こうした状況では、過渡期が終わっても命を保つのは、革新を導く思想や著述だけである。

\* J・S・ミル『ミル自伝』(村井章子訳 みすず書房)

私たちの活動だけで、社会総体が、「縮小」に向かうことはないであろう。「「禁断の果実」の甘味を知り尽くした人々に「粗食」を毎日食べてもらうことになりかねない」ことを納得させるは、大変困難な事であろう。実際は、社会の多くの人たちは、社会経済がどうにもならなくなってしかたなく「縮小」の必要性を認識していくことが予測されるが、その時、少しだけでも前を照らす思想を生み出すことが、私たちの課題ではなかろうか。次の時代まで生き続ける社会思想を作り出し、そして広めていくのが、「縮小社会研究会」の課題ではなかろうか。

上記の①②③ともに、まだまだ道途上である。今は、ともかく、ワイワイガヤガヤと、にぎやかにやってみよう。これしかないと思われる。今なすことは、…!!